高画素・高解像力偏重ではなく，真に心地良いボケ描写が楽しめるレンズ

馬場信幸写真工房
馬場信幸

1．はじめに

写真レンズのボケ描写の真髄は，大ボケよりもフォーカスを合わせたところから後方の微～小ボケとその後ろに繋がっていくあたりのボケにある。デジタル一眼の高画素化に対応した大口径・高解像力レンズの開放では，画面周辺に行くほどこの微～小ボケが潰れたり二線ボケになるなど目障りなボケになる傾向が強く，2400 万画素対応のレンズと比較しても良くない。これは開放時の周辺解像力を維持するために難度が上がる収差補正の結果であり，開放ゆえに口径食も関わってくる。

図 1　豊潤な味のあるボケ描写を実証するために DIY で製作したレンズ

そこで解像力は 2400 万画素以下に抑え，大口径ではなく開放 F 値は暗くする。そしてソフトフォーカスレンズより鮮明な画像にしつつ，全画面均等に豊潤な味のあるボケ描写にすると，これが撮影者の心まで豊かにしてくれる。このような描写は写真レンズにおいても魅力的な特長になることを図 1 のような DIY レンズによって実証できた。

2．趣味の写真撮影に必要な画素数

ある写真セミナーで A3 ノビのプリントを見せた時，これで 1000 万画素ですよと言ったら，多くのお客さんが驚いた。聞くと，プリントはしたことがないとのこと。多くのカメラユーザーは写真鑑賞に必要な画素数の概念がなく，画素数は多いほどいい，レンズの解像力は高いほどいい，と思い込んでいる。モニターによる拡大鑑賞は際限がないだけに由々しき問題である。

この 1000 万画素から A3 ノビへの出力解像度は 200dpi。これは明視の距離で見る人間の目の分解能よりも細かい。さらに A3 ノビのプリントはそれなりに離れて見るが，それを明視の

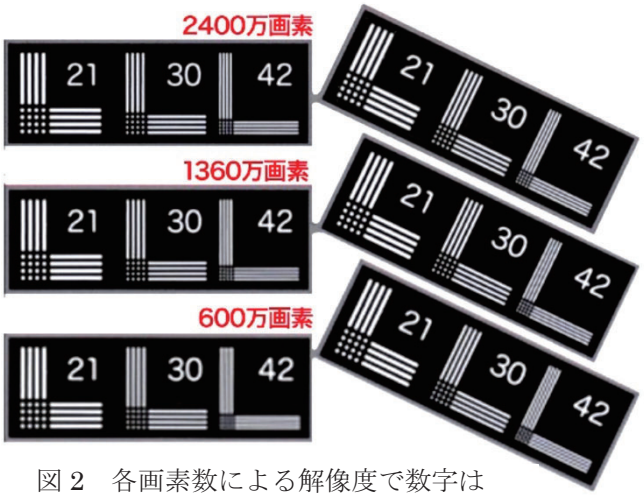

図 2　各画素数による解像度で数字は本／mm